

乳幼児期の運動発達チェックリストの作成（2）

社会・生活スキルの発達に視点を当てて

○是枝喜代治

（東洋大学ライフデザイン学部）

KEY WORDS: 発達検査, 乳幼児期, 社会・生活スキル

1. 目的

これまで人間の初期発達に関する多くの発達検査が開発され、標準化がなされてきた。しかし、現在日本で利用されている発達検査の多くは1980年～90年代にかけて標準化されたもので、少子化や地域の物理的環境の変化（公園や遊び場の減少）、地域コミュニティの形骸化などから、現代の子どもの実情に即したチェックリストの開発・検討が不可欠と考えられる。本研究では、現代の子どもの実情に沿った発達チェックリストの開発に向けて、既存の発達検査等を参考に、時代に即した新たな項目を追加するなどして、標準化に向けたアンケート調査を実施した。本稿では、昨年度報告した粗大及び微細運動の発達に続き、社会・生活スキルの発達の様相について報告する。

2. 方法

1) 参加者

調査は2015年8月～12月にかけて、名古屋市、大阪市内の保育所及び小学校、神奈川県、埼玉県内の保育所等に調査協力を依頼し、留置法により用紙を回収した。尚、保護者に対しては個人の特定がなされないこと等を、所属長を通して文書で説明し、同意を得た上で実施した。その結果、全体で382名の保護者から有効回答が得られた。各年齢群における参加者の人数内訳は表1に示す通りである。

表1 各年齢群の参加者

年齢群	人数	年齢群	人数
1.0以下	18	4.0-4.6	30
1.0-1.6	29	4.6-5.0	31
1.6-2.0	29	5.0-5.6	29
2.0-2.6	32	5.6-6.0	32
2.6-3.0	28	6.0-6.6	27
3.0-3.6	29	6.6-7.0	19
3.6-4.0	32	7.0以上	18

Total-N=382

2) 項目内容の設定

調査項目の作成にあたっては、0歳～6歳までの健常児の運動発達の経過や社会性の能力を評価できる検査（ムーブメント教育・療育プログラムアセスメント（MEPA-R）、遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査等）を参考に、新たな評価項目を追加し、計35項目を設定した。次に運動と関連した社会・生活スキルに関する項目を15項目追加し（S-M社会生活能力検査等を参考に）、最終的に50項目とした。評価項目の妥当性を検証するため、幼児教育及び保育関係者に予備調査を依頼し、表記内容を含めた各評価項目の妥当性について検証し、その後、本調査を実施した。

3) 評価手続き

評価手続きは、「各項目の内容について、お子さんの発達の状況についてチェックをお願いします。評価は各評価尺度（観点）にしたがい、「◎」＜できる＞、「○」＜多分できる＞、「△」＜多分できない＞、「×」＜できない＞の4段階で評価してください。」と明記し、評価欄に各記号を記載してもらった形とした。通過率は◎及び○としてチェック

された項目を、その年齢群において「通過した」ものとみなし、その割合が各年齢群の60%を超えた段階で、その項目の標準通過年齢（SPA）として判断した。

3. 結果及び考察

標準化に向けた調査では、粗大及び微細運動の項目同様、社会・生活スキルの項目においても年齢の経過に伴い通過率が経年的に上昇していく傾向が示された（表2）。

各項目の内容を細かく見ていくと、3歳6か月を通過した頃から、簡単なルールのある遊びに参加したり小さい子どもの面倒を見たりなど、集団活動への参加や他者への意識が芽生えてくることが確認された。設定項目の中で「ルールの複雑なスポーツ（野球やサッカーなど）で細かなルールに従って参加できる」の項目に関しては、6歳段階に入って6割以上の通過率を示す形となった。この項目は7歳以降においても83%となっており、小学校低学年においても集団参加や社会性に課題を抱える児童の存在が確認される結果でもあった。

表2 社会・生活スキル項目における項目通過率（抜粋）

項目（抜粋）	年齢群（抜粋）				
	2.0-2.6 N=32	2.6-3.0 N=28	3.0-3.6 N=29	3.6-4.0 N=32	4.0-4.6 N=30
順番を待つことができる	63	86	97	100	100
衣服の着脱が一人で行える	31	86	83	100	100
ままごとの役割を演じられる	50	79	86	97	100
かくれんぼなどのルールのある遊びを理解して遊べる	13	43	48	84	90
勝ち負けを意識して、じゃんけんに参加できる	0	39	38	75	93
数人の子どもと組織だった遊びができる	6	43	48	69	80
小さい子どもの面倒を見る	13	36	55	91	80
フォークダンスで人と手を握ることを嫌がらず最後まで踊ることができる	6	43	41	75	73
ルールの複雑なスポーツ（野球やサッカーなど）で細かなルールに従って参加できる	0	0	0	9	10

※数値=%, N=人数, 表中の太線はSPAの区切りを示す。

本調査は健常児を対象とした調査ではあるが、ASD児を対象とした過去の調査では、「ルールのあるゲームが苦手である」「同年代の子どもと一緒に行動することが難しい」など、集団活動において他者と協働して関わることの困難さや社会性の問題を指摘する記述が多数認められている。

本調査においても、保育所や幼稚園、小学校低学年の中で、対人関係に何らかの課題を抱えている幼児・児童の存在が確認された。今後は、本検査への参加者数を増やしていく中で、社会・生活スキルの発達に向けた実践的な支援方法を検討していきたい。
(KOREEDA Kiyoji)